横浜国際港都建設審議会部会

第４回　第１部会（少子高齢化関連）

平成１７年１０月５日（水）

《出席委員》小玉亮子委員（部会長職務代理）、今井三男委員、小川智也委員、
奥山千鶴子委員、齋藤史郎委員、高梨晃嘉委員、千葉信行委員、
寺澤松道委員、藤井紀代子委員、山田陸子委員、和田卓生委員

＜欠席＞　福田幸男委員（部会長）、樋口美雄委員

議事

【部会長職務代理】　　それでは時間になりましたので、第４回第１部会を開催したいと思います。

本日は、部会長が公務により欠席ということで、職務代理として私が進行を務めさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

それでは早速議論をしていきたいと思うのですが、先ほどの総会で、第１部会での活発なご議論も含めて集約しました、資料４「第１回起草委員会とりまとめ」について、さらに総会での意見も踏まえまして、この第１部会の視点からさらなる全体的なご意見や、もっと積極的にとり入れていきたい点、深めるべき視点などの議論を行いたいと思います。

資料説明は総会で行われており、この場での説明は重複しますので、省略させていただこうと思いますが、何か事務局から補足説明などはございますか。

【事務局】　　では、事務局から補足のご報告をさせていただきます。

本日ご欠席されております委員から、別途ご意見をいただいておりますので、この場で、その内容をご報告させていただきたいと思います。

主なご意見としましては、ビジョンの全体につきまして４点。まず１点目は女性の活躍の視点について、横浜らしさの１つの柱としてしっかりと打ち出したほうがよいのではないかというご意見。２つ目がすべての分野を盛り込んでバランスをとるよりも特徴を持たせることが大切であり、重点項目の取捨選択など、書かない勇気も必要になるのではないか。３点目が、当たりさわりのない内容だけではなく議論を呼ぶような突っ込んだ内容にすることも必要ではないか。４点目として、メインキーワードやスローガンなどを考え、単純化することが、市民の認知度や関心を高める上でも重要ではないだろうかというご意見をいただいております。

次に外国人労働者に関するものとして２点ご意見をいただいております。１点目が、国レベルの施策となる面もあり、外国人労働者を積極的に受け入れるという議論がどこまで自治体としてできるだろうかというご意見。２点目が、外国人に対する住民サービスや就学・教育施設の問題、医療に関するものなど、受け入れた後の課題もどのように整理ができるかというご意見が２点ございます。

最後に労働力とまちづくりの視点としまして、これまでの持ち家政策は地域間の人口流動を阻害する要因となり、高齢化などとともに地域の雇用と人材のミスマッチを招くということも言われていることから、まちづくりの中でも検討すべき課題ではないか。民間の良質な賃貸住宅を拡大することも必要ではなかろうかというようなご意見をいただいております。

また、前回の起草委員会の審議の中におきましても、女性の活躍に関する視点、打ち出し方につきましては、第１部会で追加の議論を行うということとなっております。事務局からは以上でございます。

【部会長職務代理】　　ありがとうございます。

今のご報告を含めまして、資料４に関して深めるべき視点等の議論をしていきたいと思います。

先ほどの事務局の報告の中でも、それから起草委員会のほうでもさらに議論をしてほしいということで、部会長から伝言をいただいております女性の活躍の視点について、どのように盛り込んでいけばいいのかという点が宿題になっておりますので、まずはそこを取りかかりとして、議論できればいいかと思いますが、いかがでしょうか。

【委員】　　私は、実はこの審議会の委員に応募した時の題を、「Ｇ３０」にもじりまして、「Ｙ３０」「やってみよう３０分！　あなたの意欲がハマの活力」と、書いたんです。３０分でみんな元気になろう。女の方たちもおしゃべりをやめて、３０分でいいからちょっと周りを見渡してみましょうというようなことで、何かきっかけにならないかなと。ごみの減量で「Ｇ３０」という説明があるように「皆さん、Ｙ３０です、体を動かしてください」とか、「ちょっと地域を見渡してみませんか」でも、何かそういうようなささやかなきっかけから皆さんの運動が始まっていくといいなと思っております。

それは女性の活躍にも、それから子育てに悩んでいる人たちにも、一人暮らしの方たちがほんとうに１日に１度も話さないというような中で、もし３０分間でもお隣の方と話す機会があったら、それは非常によい地域のコミュニケーションにもなり、生きがいづくり

や、健康づくりになると思います。

【部会長職務代理】　　ありがとうございます。

【委員】　　実は障害者問題は非常に重要であるし、特に障害者の基本法で３障害が一本化されるなど、障害者そのものも今大変な時期といいますか、過渡期にあるわけです。

「起草委員会とりまとめ」をざっと見ましたところ、この障害者問題が一般的な言葉で流されているような気もしないでもないし、女性問題だとか高齢者問題を、部会で具体的に出し合ってきたところが一般的な言葉で流されているのではないかなと実は感じたんです。だからここら辺はやはり具体的な処置として、そういう問題を提起して、障害者は障害者と、高齢者は高齢者と、女性は女性ということの中で、せっかくいい第１部会の中間とりまとめができているのが取り上げられなかったのかなというふうに感じたわけです。

特に、部会の中間とりまとめには「介護が必要な人も障害がある人も、自らの選択により地域で安心して自立した暮らしを」という部分など、すばらしい言葉が実は出ているわけですね。ほかにも、５番目「障害の有無や国籍、年齢や性別」とは関係なく能力が発揮できる機会がある社会という表現。こういう言葉は普通なかなか取り入れてもらえないのですれども、こういうものを具体的に入れてもらったほうがいいというふうに思うわけです。

やはり、まだまだ障害に対する市民の目や、逆にまた障害者自身も欧米やヨーロッパとは違って、障害者市民が一歩それに対する後ずさりといいますか、避けて通りたいなというような感じが実はしてならないのです。これが１０年前はもっとひどかったのですけれども、だんだん、だんだんそういう点では非常に理解をされてきているというふうに思っていますけれども、まだまだ、仮に外部障害の方がちょっと困っているときに、何人かはそこを素通りしてしまうというのがまだ日本の状態だし、横浜市民の状態じゃないか。その中でその障害者が何に困っているのかと、何に手助けしてもらいたいのかと問うことはまだできないという、今の横浜市民の状態じゃないでしょうか。

これはヨーロッパやアメリカなどに行くと、もう最初から仮に障害者がいれば何か手助けをしましょうかという、障害者自身は自分で自立をしたいという気持ちでできるだけ自立の方向でやっていますけれども、やはり社会に出るといろいろなハードな面がたくさんありますから、そういう点ではやはり手助けが必要なわけです。そういう点での一声かけが日本は非常に少ない。こういう問題もこれからのビジョンの中では、２０年後の先を見ていく場合には、早く横浜がそういう状態になってもらいたいと私自身端的に感じている

し、字句の中でそういう言葉も入れなくても、障害者という言葉を入れれば、そういう点が変わってくるのではないかと思います。

【委員】　　総会の時にも少し申し上げたのですが、やはり今おっしゃったように、私は市民の人たちすべてが、女性も男性も、高齢者も若い人も、障害を持った人も、能力と個性とやる気に応じてすごく豊かに暮らせる社会を実現というのは、やっぱり全体像の中に１つある必要があると思うのです。

「国際」というところ、私は文章がすごくおかしいと思います。「横浜人＝国際人」というのは、まるで横浜人全員が国際人みたいではないですか。国際性を持ったほうがいいけれども、それが「国際人を育む」、みんな国際人になるのがいいのかと。それもある意味大事ですが、でもそれが第１に来るというのはおかしいと思います。「世界の人から選ばれる都市」とありますが、別に選ばれなくても、市民がみんな豊かに暮らせるということが私は一番大事だと思うのです。ですから、もう少し市民の立場に立ったものを１つ入れないといけないと思います。

他にも、「市民力」という言葉も、結局は市民に力をつけてもらって行政に協力してほしい、というような感じに読めてしまったら、これでは何にもならないと思います。

このビジョンは、市民が豊かに暮らせるということが、やはり第１の柱として入るべきだと私は思います。

また、障害者や女性の部分をどこに入れるかという点ですが、「施策の方向」の部分で、いろいろなことにちりばめて盛り込んでいけばいいと思います。ですから、どのようにちりばめるかを議論すればいいと思います。

【委員】　　全く今の続きになりますが、要するに右の列の「施策の方向」の１－⑤で「誰もがゆとりも持って安心して暮らせる都市の実現」、その２つ目の「誰もが平等に能力を発揮できる機会がある社会を実現」、ここですよね。要するに、ここに男女共同参画社会の推進の視点とか、障害者、あるいはさらにもう一度高齢者を入れてもいいかもわからない。各論みたいな形でしっかりとここで言葉として盛り込めば、それで明確になるのかなと思います。「誰もが平等に」というものすごく抽象的な言い方になっているので、ここを具体化したらいかがですかという案です。

それから今もありましたが、「横浜人＝国際人」というのは何だろうというのは、実はだれもが思っていたわけです。この部分は無くしたほうがよいと明確に言っておくべきだと思います。

総会で明石委員長もおっしゃっていましたが、このような浮いた言葉はあり得ないと思いますので、その辺はお願いいたします。

【部会長職務代理】　　はい、部会長にも、こういうご意見が出たということを伝えておく必要があると思っております。

今の障害者や、女性・男性とか、高齢者という言葉ですが、確かに今の資料では障害者という言葉がないですね。女性もそうですし、この点について議論したということをお伝えすることが必要かなと思いながらお聞きしました。

【委員】　　今おっしゃったように、第１部会としては、このビジョンの一番最初に、だれもがほんとうに幸せに暮らしていくんだというような、何かそのような市民が共感できるようなことを打ち出したほうがいいのではないかと、私もそう思います。

そこに障害者や高齢者も、具体的に女性もと言葉として盛り込むかどうか、そのようなことだと思います。

あと、さきほどの「Ｙ３０」ではないけど、実を言うときょうの新聞にも出ていましたが、前の岐阜県知事が、岐阜県では高齢者は７５歳以上をいうと。６５歳から７４歳は壮年だというのです。やはり私は前にも言ったように、持続可能な社会にもっていくには、働くということを７０歳ぐらいからでも考えないと、とても日本はやっていけないと思うのです。むしろ横浜から、何かそういう取り組みをいろいろな自治体に拡げていくことで、逆に国を動かせるのではないか。やっぱり働ける人はどんどん働いてもらう。それは障害者や女性だけの問題ではなくて、性などを問わず、可能な人はどんどんチャレンジしていただいたほうがいいのではないか。何かそういう打ち出し方を、横浜らしさというか、横浜の特徴のなかで打ち出せないでしょうか。

要するに、横浜は先進性というけれども、ちっとも先進性ではないんです。これは私も実を言うと経済のところで経験があって、横浜の人たちがみんなしり込みしていたら、さっと神戸の人がやっちゃったんです。これにはもう参りました。ですから、そういう意味ではいい機会なので、さきほどの「Ｙ３０」じゃないですが、何かそういう打ち出し方もできればと思います。

ですから、第１部会としては、最初に、幸せの実感や安心して住めるまちという、何かいいフレーズを入れて、ほんとうにそれに向かってみんなでチャレンジしていくようにできればと思うんです。

【委員】　　皆さんのご意見に全く同感です。私もこれを見たときに「横浜人＝国際人」、

これが最初に来るということでいいのかなと本当に思いました。

やはり、みんなが共感できる、暮らしやすさ、安心というような視点は、第１部会でずっとそれを議論してきたのですから、ぜひ入れていただきたいと思います。

あと、外国人労働者に関するご意見が報告のなかでもありましたが、私はここですぐに出てくるのではなくて、まず、女性も働くし、退職した人も、若者も働けるというような、そういう議論が十分なされた上で出てくるのであればわかりますが、それがなくていきなり外国人労働者というのは、少し論点が飛躍し過ぎではないかと思いました。

あと、資料４で、１－⑥と２－④が一緒になっていますが、中身を読むと１－⑥の部分があまり入っていないのですね。私たちがここで議論していた、世代間のコミュニケーションであるとか、地縁型ネットワーク、テーマ型ネットワーク、いろいろなことを言ってきたのですけれども、なかなかそれが入っていない。

私は、若者や少子化問題ということへの何か危機感であるとか、これからどうしていくのかという論点は入れたいと思うのです。今の日本は、出生率低下の底が見えないという中で、ほっておいても高齢化はするわけですね。増える高齢者への施策というのは目に見えてやらなければいけない。しかし少子化の部分は、危機感なく放置すれば多分どんどん今後も下がるわけで、子どもたちの育ち方ということが入ってはいますが、女性という視点からでもいいかもしれませんが、何か若い世代が元気づけられるというか、そのあたりのアピールをもう少し入れられたらいいなというのが正直な気持ちです。

【委員】　総会でも申し上げましたが、やはり皆さんと同じように、ここの「横浜らしさ」のアピールは、何といいますか、かなりマスコミや行政から見たときの横浜の国際的なイメージを意識していて、実際、市民が横浜に住むかどうか、例えば東京に勤めていて、千葉に住むのか、または横浜にするのかという選択の場面を考えたときには、もっと単純に交通の便がいいかとか、住んでいてそこの市のサービスがいいかとか、土地が安いかとか、緑が多いかとか、実際はかなり具体的な、あまりここに出てきていないような基準で決めている中で、ここに書いてあるアピールというものが実効性あるものなのかという点が疑問だったのです。

あともう１つ、第１部会という立場から言うと、「都市像」の「安心社会、支え合い」というところにある、ここに書いてあることだけを見て、それでほんとうに少子化や高齢化の問題にこたえているイメージになっているかというと、あまりそこは明確に打ち出せていないのではないかという気がしています。

報告の中の意見にもありましたが、やっぱり何でもかんでも盛り込むとだんだんこのようにぼやけてきてしまうので、できるだけ、例えば少子化に対しては女性の自立であるとか、子育ての支援であるとか、あとは教育、労働とか、高齢者に対しても教育の問題であるとか、福祉の充実であるとか、いくつかのかなり具体的なレベルでの実現すべきイメージや、やらなければいけないというものを、もう少し絞った形で「都市像」の枠組みに入れるほうが、第１部会として何が言いたいのかということが全体の中でも明確になるのではないかというのが私自身の印象です。

【委員】　私も「全体都市像」の部分で、率直に言って、これから２０年間の都市像を共有しようとするわけですから、横浜人というのはこの２０年間さまざまな「都市像」に向けて、どういう横浜の人であればいいのかのような論議があってもいいのではないかという気がします。

それでこの「全体都市像」で「市民力・地域自治」という言葉を使っているのですが、いずれにしても今日も議論があったように、例えば自己実現であるとか、幸せづくりであるとか、そういうことを実現していくときに何が必要なのかということは当然問われてくると思うんです。今の社会の中で、なかなかコミュニケーションもうまくいかないとか、それぞれの人が孤立しているというような、いろいろな状況があるわけです。その中で、では「横浜人」として「都市像」を実現していくときに、ここに書いてある「市民力」という言葉がいいのかどうかはわかりませんが、ここにある「自発的に社会的責任を果たす」とか、「すべての市民が地区経営に参画する」といくら言っても、それを自分のものとして横浜の人が受けとめていくためのイメージというか、そういう議論をある程度しておく必要があるのではないかと思います。人それぞれの問題、置かれた立場などに関係なく、ただ「都市像」だけでいいのかなという気がしました。

要は、少子高齢化社会で、これだけ複雑な社会ですから、ずっと議論になっていたように、さまざまな協働という問題も大きな課題になってくるわけです。そういうことを推進していくためには、やはり周りに対する思いやりであるとか、あるいはやさしさであるとか、そういうことを横浜として育てていくことを「横浜人」の特徴みたいにしていかないと、ほんとうにこのビジョンを横浜で暮らしている人が共有して、ここで言う「市民力・地域自治」というようなことになかなか結びついていかないのではないかと思います。そういう意味で、もう１つこの「都市像」を実現していく上でこういう「横浜人」みたいな議論があってもいいのかなという気がしました。

【委員】　今、皆さん方のご意見を聞いていて、やっぱり横浜に住んでいる人が横浜っていいところだなと思うのは、暮らしやすさということだろうと思うのです。相手を思いやれる、そういう生き方とか、それも含めてですが。

そういう暮らしやすさみたいなものの反映という点では、あまりこの起草委員会では出てきていないように思います。

なぜだろうと思っているわけですが、どちらかというと競争社会とか、そちらの方向性の発想があるのかなという思いはしています。やっぱり、そういう競争社会の中で打ち勝っていかなければいけない、新しいものをどんどん受け入れていく、もちろんそれが横浜のよさでもある。それから横浜に住んで３日たてば「横浜人」だというような、どんどん新しい人も受け入れていくのが横浜の良さなわけなのです。

ところが今、皆さん方のお話を聞いていると、そういう生き方だけではなくて、現代風で言えばスローライフといいますか、落ちついた生活をしていくという方向のお話なのかなというふうに感じていて、そうすると、これから横浜というのはそのようなスローライフと、それから年代にもよりますけれどもファーストライフという２つの側面を持ちながら生きていかなければいけない都市なのかなという印象を持ったのです。だから、もしもそういうことが２つできるのであれば、それが新たな横浜の特徴になっていくという感じもしないことはないと思っているのです。なかなか複雑な話だと思います。

今の横浜はスローライフとファーストライフ､例えば効率性を追求する生き方､やり方、政策。もう１つは効率性でなくて心地よさであるとか、多少ロスがあっても、むだがあってもいいじゃないかというような生き方があって、だからこれは今、横浜もその分岐点にいるのか、それとも両方がこれからも入りまじっていかないといけない状況なのか。わからないですけれども、今までとは違った横浜の方向性みたいなものなのかなという感じがしました。

先ほどの女性の問題で、人口の半分は女性ですから、横浜の女性がいきいきと、楽しく生きられるまちになることが大事だなというふうに思っています。女性に男性がくっついていくという、横浜のルミネなどはそういうコンセプトでつくったところで、女性が来るようにつくってあるんですね。女性が来ると男性も一緒についてくると。金払うのは男性だという構想ででき上がっている。やっぱり女性がいきいきということが、それを多くの市民が受け入れてくれるのであれば、それはいいことだなというふうに思っています。

女性が生きていく上で、女性がやらなければいけないことが、もちろん男性もそうです

が、２０年たってその割合が減ったとしても、おそらく多くあるのだろうと思うのです。男性よりも。そうすると、やはりスローライフな生き方でないと、社会が成り立っていかないのかなというふうにも思ったりします。

ただ競争社会というものも国際的にはあるわけですから、それはそれでまた保障しないといけないということで、少しこの第１回起草委員会の枠組みと全然違う話になると思うのですけれども、そういうこともあるのかなと思います。

【委員】　　最近、少子化というのはやはり女性の社会進出がうまくいかないところもかなり影響があるということで、私の仲間の間でも男女共同参画ということが非常に取り上げられていて、横浜のある女性が、日本医師会の、関係する部会の長になっていろいろ活動しているわけです。

やはり女性の社会進出云々等はだれもが言っているのですが、要するに女性だけでは解決できないということですね。これはもう当たり前のことですが、我々医療界においては男のほうはほとんどそういうことに関心を持ってこなかったということが非常に問題になっていて、もう今は医学部を卒業する３分の１は女性なわけでございまして、非常に現状が問題になってきている。要するになかなか社会へ出ていけない。結婚して子どもを持って、その後がうまくいかない。それを大きく拡大したのが一般の今の世の中だというふうに僕は思っているわけです。

それにはやはり、どこかに男女共同参画という言葉を、「誰もが」という言葉のなかに入っているといえばそれまでですが、その辺をしっかり強調していかないと少子化対策等にうまく対応できないのではないかということも１つ考えております。

それから先ほど高齢者の、年齢のことを言われました。やはり我々でも７５歳以上で考えたほうがいいのではないかという考えがかなり強くなってきています。したがって高齢化といっても７５歳以上という考え方で、再度はっきりそこで線を引いたら、その問題等も内容がかなり変わってくるのではないか。何十過ぎても社会参画していろいろとやっていただければ、今言われている高齢化社会の問題と違った問題点がかなりクローズアップしてくるというふうに思います。したがって、例えばいろいろな数値で目標を置くならば、横浜市における高齢者は、７０歳以上にするか７５にするか知りませんが、ぐんと数が減って、考え方が非常に違ってくるという、横浜においては将来そういうふうにするのも１つの考えかなと思っております。

【部会長職務代理】　　ありがとうございます。

ご意見をいただいた中で、高齢者の問題、女性の問題、障害者の問題。女性の場合、子育て中の女性をイメージするといいかと思うのですが、先ほどのスローライフとファーストライフでいうと、働くとしたら効率が悪いとみなされがちな人たちですよね。子どもを抱えている女性は、効率を優先する社会に合った働き方ができないとか、身体的に何らかの障害があった場合にも、高齢者の場合も、そうみなされてきたわけです。

スローライフという観点を導入したときに、効率で切って捨てる考え方にはならないような社会のあり方というのが構想できるのではないか、効率が悪いとみなされてきた人たちを含み込んだ、そういう横浜ということがここでの議論になるのではないかなと思ってお聞きしました。

それで、実は起草委員会からの宿題は、女性の活躍に関する議論をしてほしいということと、もう１つ、スローライフにもかかわりますが、「ゆっくり、ゆったり」という言葉について、こちらから提起したわけでもありますが、それをどう組み込めるかということを議論してほしいということがあります。

資料４の１－⑤ですけれども、私たちで議論を重ねていく中で「ゆっくり、ゆったり」という言葉を入れたのですが、どうも起草委員会のほうとしては、「ゆったり」はよくても「ゆっくり」はどうだろうという議論があったというようにお聞きしています。「ゆっくり」でいいのかということです。その議論が出て、結局「ゆとり」という言葉になったようで、その結果「ゆとりを持って安心して暮らせる都市の実現」という形になっているわけです。私どもとして、これをさらに議論していく宿題がございます。女性、高齢者、障害の問題にもかかわってくるところだと思いますが、ぜひここで議論できればと思っておりますが、いかがでしょうか。

【委員】　私もざっと起草委員会の議事録を読ませていただいて、そこの議論も少し読みました。それは先ほどからずっと出ている、スローライフやファーストライフという話であるとか、競争社会と対比して共生社会みたいなところのバランスという視点があるのだろうなと思いました。

スローライフという言葉の中に、ファーストフードに対応したスローフードという言葉があります。それはどういうものかというと、パッパとつくってすぐに食べられるような食事ではなくて、時間をかけてゆっくり手をかけて、いわゆる和食のような、“だし”からとってというような、そういう食べ物のことですよね。

やはり時間をかけるということにはそれなりに意味があって、それは文化ということに

もつながるでしょうし、共生社会につながることもあると思うのです。時間がかかることをマイナスにとらえるのではなくて、成熟であるとか文化みたいなところにつながる意味での「ゆっくり」だったのかなというように思うのです。ゆとりでもいいのかなとは思うのですけれども、その意味をお伝えできたらよかったなということをすごく思いました。

競争社会というよりも、明石先生がグローバルというものの説明をいろいろなさった中で、やはり日本が島国である以上、世界の各国と手をつないで共生していくという視点がなければ難しいだろうなということがあります。都市の魅力ということでの卓越性、個性というところもありながら、やっぱり世界の中で共生していくという視点、そういったものも入れられなくてはいけないのではないかなというように思いました。

【委員】　横浜らしいというか、横浜に住んで、何で素敵だと思うのかということを考えました。私は少し生涯教育にも関係しているもので、最近地域で生涯教育というものがすごく盛んになっていると思うのですが、その地域の生涯教育を行っている運営委員は地域を担っている多様な人物、人材で、７０歳以上の男性たちが多く、その中でつくられる講座は、ほんとうに知恵を絞っています。運営委員というのはみんなボランティアですから、市民参加で考えられたまちづくりも区によって違うテーマを取り上げるということから考えまして、私は最近各地区からのよりすぐりといいますか好評だった講座を集めて、その情報を共有することで横浜のよさを知る、講座の中には、横浜見学であるとか、意外な横浜発見コースとか、いろいろなおもしろいテーマもありますので、そういうことに触れながら学び、与えられたテーマで自己発見していくというように、いきなり地域づくりをではなくて、段階を踏んでいくことがまず第一歩ではないかと思います。みんな横浜っていいなと思うことから大切にしていくと思いますので、何かそういうところから運動を始めればいいのではないかと思います。

【委員】　横浜は都市全体の風景としては、住宅都市ということがおそらく色合いとしては大きいだろうと思うのです。先ほど申し上げた、暮らしやすさとか「ゆったり、ゆっくり」というのは、男性であれば仕事をして、家に帰ってきて、土曜日、日曜日奥さんと２人で近くの公園を散策する、そういうことなのかなというように思うのです。それができるということが横浜のよさ、みたいな話なのでしょうけれども。

もう一方で、横浜というのは、商売をするまちとしては、これだけの人口があるにもかかわらず十分ではないということもあるわけなのです。

そこでスローライフとファーストライフということでいえば、お仕事はファーストライ

フでやっておかなければいけないかもしれないけれども、いざ自分の生活に戻ったとき、また地域に戻ってきたときにはスローライフが保障されているという、何といいますか、きちっとけじめがついたというか、そういうことができるということが、おそらく横浜の人間だけではなくて日本人全体に要求されていることではないのかなと思うのです。それが保障されている都市ということかなというように思っているわけです。

ですから、問題は、そうやって働いている人ではない方々の生活をどういう角度で位置づけていくかということなのです。もちろんお仕事をリタイアされている方々については、スローライフの中で自分の今までの経験や知識だとか、人間性などを、地域社会や他人の幸せのために提供していただくということも必要なのでしょうけれども、仕事に入る前までの年代の方々については、今はどちらかというとファーストライフを強要しているわけでして、それでいいのかなという、ここをどうしていくかということが１つあるのかなと思います。いずれにせよ、その両方が共存できる都市というよりは、そのけじめがきちっとしている都市ということが求められていくのではないかと思います。

今まではファーストライフ一辺倒で来ましたし、効率性一辺倒でしたから、そうではないものも保障できる都市ということが必要ではないかなと思います。

【委員】　効率性やスローライフという議論ですが、今、財政難の中で効率性も追求していかなければならないということは確かなのですけれども、それがもたらす理想の姿、何のためにそのように効率的にやるのかというと、いろいろなハンディキャップを持っている人も全部ひっくるめて市民の生活が豊かな社会をつくるということが目的なわけです。それをやはり入れる必要があるというように考えますと、今、表立っては効率性が追求されていますから、それを最初に出すといろいろな抵抗があるということであれば、スローかファーストかということにこだわらなくても「ゆとり」ということで全部包含する形になりますので、ここは少し譲って「ゆとり」でいったらいいのではないかと思います。

それから、そのようなハンディを持っている人も豊かに暮らせるという視点から、効率性の面での問題があるのであれば、個人の意欲や能力などに応じて暮らせる社会であるとか、そういう表現で全部包含していけばいいと思うのです。それで、女性の視点であれば男女共同参画社会の実現とか、そのようななるべく多くの人がうなずける形でまとめておいて、結果として個人みんなが住みやすい、そういう豊かな社会になるという打ち出しをすることがビジョンとして一番大事ですから、そのまとめを「全体都市像」のところで盛り込んでいくべきだと思います。そのためにいろいろな市の施策もありますし、それから

協働もあり、「市民力」や「地域自治」などもあるわけです。そういう目標を失わないように、やはり全体像のところであるべき姿というものを入れて、そのためにもみんながうなづけるような形で書き込むということがいいのではないかと思います。

【部会長職務代理】　　ありがとうございます。いかがでしょうか。

【委員】　　実は全く同じことを考えていたのですが。

その前に、「ゆっくり」と「ゆったり」という話ですが、「ゆっくり」というのは時間軸の印象です。結果として「ゆったり」になるのだろうなと。要するに言葉の遊びのような感じがするのですが、やはり結果的にそこに、状態としてあるのは「ゆとり」なのかなということなのです。「ゆとり」という概念というのはすごく重要なのかなという感じがするわけです。

共生・競争の両社会とスロー・ファーストというような話の中でも、やはり全く同じなのです。一方では、やはり企業社会は成果主義も入れていますから、食うか食われるかで、都市間競争の１つの実相もおそらくそういう部分があります。これはどうにもしようがないです。一方で共生という部分もあって、だからこれは宿命であって、おそらくずっと両方が共存していくのです。その中でどういうふうにそれをうまく統合していくかという話になったときに、やはりシビアな、がちがちの企業マンの生き方でも確かに「ゆとり」という考え方はある。そういうような概念のくくり方というのはあると。どういう部分であっても、どういう層であっても、やはり「ゆとり」という、その部分。

押し広げていくと、要するに多機能型のいろいろな装置があって、その中に例えば「ゆとり」という言葉も出てくるのだろうけれども、１つ出ているのは、さきほどの発言にもありましたが、例えば高齢者７０歳論だとか、あるいは７５歳論があるかもわからない。そういう中で、それもやはり１つの象徴として、横浜らしい「ゆとり」というような表現の中で、例えば高齢者は７５歳と、それまでは「ゆったり」した「ゆとり」の中で頑張るみたいな描き方であるとか、そのためにいろいろな装置をそこで設けていくという、そういうことは可能なのかなと思います。

【部会長職務代理】　　ありがとうございました。では次に。

【委員】　　私もこの「ゆっくり、ゆったり」という言葉には相当疑問があったんです。そこで率直に娘にこの言葉についてどう思うかと聞いたら、これほどいい言葉はないというのです。ですから年代の違いなのかなとも思います。

やはりいろいろ考えてみますと、地域社会というのは非常にせわしなく追いまくられて

生活している。仕事から家に帰ってきたときに、ほんとうに落ちついてゆっくりできるという横浜市になってもらいたいということになれば、これはもう的確に表現しているのではないか。私も娘にいろいろ聞いてそれが実感としてわかったのです。

今までこういう言葉を、字句をこういうところに使うということはほとんどないですね。そういうところに非常に疑問を持ったのです。

「ゆとり」でもそれほど変わりないけれども、「ゆとり」という自分自身がつくっていくということと、この「ゆっくり、ゆったり」というのはちょっと同じようでちょっと違うような感じも実はするので、私はこのまま生かせればと思います。

ただ、それをどのように市民が理解するかですね。「ゆったり」と「ゆっくり」、「ゆとり」という言葉をどう市民が理解していくか。その上に立って、具体的にではどういうふうに、ということになっていくと思うので、そのあたりは議論すればいいのかなと思います。

年代の差もあるのではないかと、私は感じました。

【部会長職務代理】　　ありがとうございます。どうぞ。

【委員】　　事務局に聞きたいのですが、この「ゆとり」についての市民意識調査の結果があれば、教えてもらえますか。

【部会長職務代理】　　事務局のほうから、いかがでしょうか。

【事務局】　　探させていただきます。見つかりましたら、後ほどご連絡させていただきます。多少時間がかかると思いますので、よろしければ議事をお進めください。

【部会長職務代理】　　はい。いかがでしょうか。

【委員】　　「ゆとり」という言葉自体が、もうおそらく２０年近く使われてきているのではないかと思うのです。実際、「ゆとり」という問題について、多くの市民の方がどう受けとめているのかと。私は「ゆとり」ということについて、確かに２０年のスパンで考えれば多少２０年前よりはいいですが、本当に私たちの目指す「ゆとり」ということで受けとめ切れている今の生活実態とか、そういう状況があるのだろうかということを考えたときに、少し否定的にならざるを得ない。ということになれば、もう「ゆとり」という言葉は使わないで、横浜らしく、今いろいろ議論になっている言葉でイメージをはっきりさせたほうがいいのではないかと思います。先ほどもありましたように、具体的なイメージをはっきりさせたほうがかえっていいのかなというように、私は率直に言って思います。

高齢化してきて、地域活動などのさまざまな面では、いわゆる企業社会とはまた別の価値観がいろいろありますから、そういう意味では、そういうスローライフ的なものをきち

んと許容するというか、それを受け入れる社会というものを明確にしたほうがいいのではないか。そういう点で、ゆとりという言葉よりももっと市民の皆さんと共有できる表現で。この言葉はもう大分カビが生えたのではないかという感じがいたしました。

【委員】　全くそれでいいのです。もっとふさわしい、フィットする言葉があればいいだけの話であって、全然構わない。確かに古いです、「ゆとり」と言っても、すっと頭の中を通り過ぎていって残らないかもわからない。

【委員】　私も皆さんの意見を聞いていて、「ゆとり」というと何か生活に「ゆとり」があるかどうかということを考えてしまうと、何か「ゆっくり、ゆったり」と若干違うなという気もします。それから皆さんのお話を聞いていると、仕事をしているときにはファーストライフでいいと、仕事をしていないときは「ゆっくり」にしたらというような議論があるように思えてしまうのです。そうではなくて、逆に仕事をしている人も、ワークアンドライフバランスではないですけれど、これからは男性の方もなるべく早く家に帰ってきて、働いているときにも「ゆとり」があって「ゆったり」する時間もあるといいますか、働く人はみんな夜９時１０時まで働く、家族において１人は働く人で常にファーストライフで、女性のほうは家にいて、ということではないというような社会的なイメージをつくっていったほうがいいと私は思っています。１人の個人の中にファーストライフ的な部分もあればスローライフの部分もある。今、そのスローライフの部分というものがなかなか成熟していないということで、そこをもっと拡げていこうという、そういうことかと思います。

　では女性が家にいて子どもを育てていてスローライフかというと、これもまた違うんです。ということで１人の人生の中にその両方がきちんとあって、それが使い分けできて、スローライフのところをもっと充実していくというようなイメージ、それができたらいいなと思っています。

【委員】　今のスローライフとファーストライフの議論、やっぱりファーストライフというビジネスの部分は、日本だけで決めるわけにはいかなくなってきているわけです。グローバル化もあり、持続可能な経済活動をするにはそれなりのことをしななければいけない。ただ、今簡単に言えば時間短縮ではないですが、そういう視点ではもっとほかの国を含めて成熟してくれば将来はかなり違ってくるでしょう。２０年後を想定した場合は、確かに皆さん今おっしゃったように、一番わかりやすいのは、ビジネスはかなりファーストライフということは避けられないだろうということです。やはり生きていかなければいけ

ない。それで実際の自分の生活というのはスローライフじゃないですが、「ゆとり」といいますか。確かに４０時間労働制になってみるとかなり違ってきたなというのはあります。そういうことと、どっちがどっちという明確な区分けはできないけれども、複線というよりも、もうこれからは複々線のように、かなりそういう動きも出てくるのではないでしょうか。

ただ、やはり個人個人が、ここでテーマに出して幸せになるんだと、「ゆとり」が実感できるためにはこういう具体論をやっていかなければいけないというなかでは、ビジネス社会はなかなか難しいなという感じは持ちます。希望は希望ですが、なかなかそれでは。このグローバル社会では。

実はこの間、前の政府税調の会長さんの話を聞いても、とにかくもうイノベーションだけでは日本は生きていけないし、どんどん負けていて、ブーメランではないですが国際社会で特に半導体分野とかで負けてきているのです。ところが、先を行く付加価値がかなり日本にはあるのですね。だから今は何とか持続をしている。海外の人たちがその会社の辺りをうろうろしているというのは、何とかそういう情報を得ようということらしいのですが、やはり競争社会で、これは避けられないことだろうということなのです。

そういう意味では、私はもう複々線ぐらいはしかたがないかなと思います。ただ、ここで「ゆったり」とか「ゆっくり」とか、その気持ちをやはり幸せをつかんでいくような感じに何かうまくフィットできるようにできればいいのかなという感じがします。

それからこれはキャッチフレーズの部分ですが、「横浜人」という言い方と、「ハマッ子」と言う言い方がありますね。３日住めばハマッ子ということですが、江戸っ子は３代続いてということで、何かそういうワンフレーズでできるようなものがないのかなという気がします。どちらかというと、私は「ハマッ子」の方がよくて、江戸っ子みたいなイメージかなという感じは持つのですが。端的に市民にわかりやすいというか、何かそういうフレーズがあったほうがいいのかなという感じはしました。

今の「ゆっくり、ゆったり」という議論も大事だと思いますが、部会にとっては一番最初の問題に帰着するような感じがしますので、そのような続け方をできればと思っています。

【部会長職務代理】　　ありがとうございました。

【委員】　　皆様の議論はよくわかるのですけれども、「ゆったり、ゆっくり」という言葉から受ける語感がすごくだらだらしているイメージを感じてしまうのです。ですから「ゆ

とり」がまずければ「余裕ある」などでもいいのですが、標題はそのようにして、文章の中でスローライフのようなことを説明したほうがいいと思うのです。

【部会長職務代理】　　いかがでしょうか。

【委員】　　私は「ゆとり」というとやはり高度成長期を思い起こしてしまって何か違和感があるのですけれども、それはそれで言葉を探すとして。

先ほど「横浜人」の話をされましたけれども、私も「横浜人」という言葉、ものすごく抵抗感があります。なぜ、ここでそのような新しい言葉といいますか、何か原住民みたいな、縄文人か弥生人みたいな言葉を使わなければいけないのかなと、ちょっとわからないんですね。

横浜で生まれ育った人間として、歴史性もあるし、やっぱり「ハマッ子」と言ってもらいたいと思います。「横浜人」というと、何か違う人みたいな感じがします。

【部会長職務代理】　　「ゆっくり、ゆったり」にかわる言葉というのは、ちょっとこの場での議論では難しいということで、今の議論を含みとっていただきたいという要望を起草委員会のほうにお伝えする、ということでよろしいでしょうか。

事務局どうぞ。

【事務局】　　先ほどの「ゆとり」に関する市民意識調査についてですが、手元にございます平成１７年の市民意識調査につきましては、項目としては特にそのような調査はしておりません。

かなり漠然とした内容でございますので、これまでにつきましても「ゆとり」そのものについての意識調査というものは今のところ見当たりません。ご参考になるかどうかはわかりませんが、具体的に、例えば地域社会に関する市民意識として、日常大切だと思っている人として家族や親戚縁者などの増加に対し、逆に勤め先や仕事などについては減少してきているというような意識調査はございます。

このような具体的な市民意識調査につきましては、第１回総会及び部会の審議資料の中に、参考資料としてまとめてございます。もしよろしければ後ほどごらんいただければと思います。

【部会長職務代理】　　ありがとうございます。それでは「ゆっくり、ゆったり」の件はそのような形で、それから「横浜らしさ・アピール」のところなどでの「横浜人」に対する違和感のご意見や、第１部会の議論として、市民生活の視点が入ったアピールにするということもご検討いただきたいということ。また、障害者や女性の視点もきちんと踏まえ

た形にしていただきたいということ。それから特徴的な打ち出しができるような内容を考えていきたいというご意見もあったと思います。

まだ次回、第５回の部会がございます。次回は部会長がお戻りになられますので、今日の議論もしっかり部会長にお伝えして、また、起草委員会のほうにもお伝えしていきたいと思っております。

事務局から日程の連絡

【部会長職務代理】　　それでは第４回第１部会を閉会させていただきます。ありがとうございました。

―― 了 ――